

ある日嫁がロリになりました!?

〜①初めての絶頂編〜

サンプル

僕の手の中で

小さな小さな膨らみが

わずかに変形する。

指先の動きに連動するように

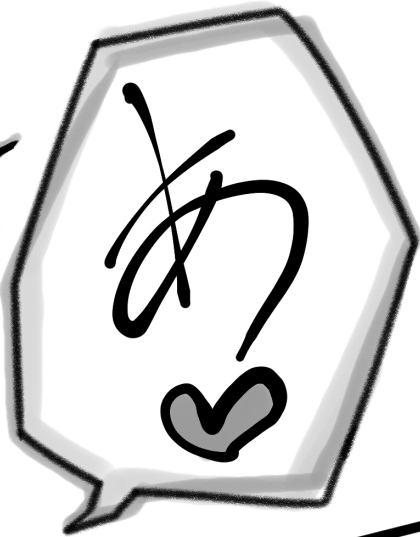
《君》は甘い吐息を吐いた。

小山のてっぺんにちょこんと飾られた乳首がツンと立っていて、

それを指先でそつと撫でれば

《幼い少女》は耐えられないというように仰け反った。

「あっ……♡ やっ♡ びりびりってえ……へんになっちゃ……！」



我慢ができないといった様子で擦り合わせる太腿に気づいていないわけではなかった。
ただ、少し自信がなかったんだ。

だって

こんなにもおかしくなってしまう

《奥さん》を

見たことがなかったから。

「はっ、はあっ……♡　そこ、もっ……もっとお♡」

今や僕の身長の半分近くになってしまった《彼女》が、

大人だった時に見せたことのないような恍惚とした表情をしている。

一体何が起きているのか。

混乱する今の僕には衝動のまま彼女を愛撫することしかできない。

何がどうして、なんて

今そんなことどうだっていいんだから。

ぐちゅぐちゅと愛液で溢れたソコを掻きまわせば

肩までの短い髪を振り乱して嬌声が響き渡った。

「ひゃっ、あっあっ♡ やだ、なんかきてっ……♡ 変になっちゃ……！ んん♡ も、
らめっ……♡ たかひろしゃあん……！」

台所の踏み台の上で——ビクビクと少女の体は跳ね上がった。

一・成長逆行

その日は早めに仕事を上がることができ、僕——《藍澤孝宏（あいざわ・たかひろ）》は秋になりあつという間に暗くなってしまった部屋の明かりを一番に点けた。一番に、というのは時々僕が最初でないことがあるからだ。僕は一年前に仕事で世話になっている方からの紹介で、端的に言えばお見合い結婚をした。相手は僕より二つ年上の《千紗（ちさ）》さん。僕の取引先の社員さんで、かなりやり手で、今は部長も務めている尊敬できる人だ。で、今年二十六になった僕はまだまだ平社員。出世の話なんて聞いたこともない。……と、そんなわけで今この部屋には僕と、もう一人《僕の奥さん》と一緒に住んでいる。年上ということもあつてどうにも頭が上がらず外で彼女のことを話す時も《僕の奥さん》と呼んでいるが、同僚からは揶揄われてばかりだ。とはいえ、《うちの嫁》なんて呼ぶことこれか

ら先もないとは思うけれど。

そうして今日も仕事で忙しい奥さんの代わりに僕が夕飯を作って待つて居ようと台所に立った時だった。スマホのバイブが机の上で振動した。どうやら電話だ。まさか職場からか？ と慌てて見に行けば、画面に映し出されていたのは僕の奥さん——千紗さんの名前だった。

「あれ？ どうしたんだろ」

いつもならば『今から帰るから』と短いメッセージがスマホに届くだけなんだけれど、と不思議に思ったものの僕はすぐに電話に出た。

「もしもし」

『……たか……さん、わた……』

「……ん？ えっと、千紗さん？ ちょっと聴こえにくいみたいで、どうしました？」

『……むかえに、きて』

「えっ？」

聞こえた声は掠れているのか妙に上擦ったようにも聞こえて、とにかくいつもの千紗さんらしからぬ声だった。しかも、幻聴でなければ『迎えに来て』と……？ 出会って結婚してからの今までそんなこと一度もなかったというのに、どうしたと言うんだろう。すると突然ぶつりと通話が切れた。どうしたものか、掛け直そうかと思っていると彼女からメッセージが届いた。地図の画像付きで。

「ここはー……千紗さんの会社の近くだよなあ」

一体何が起ったのか、とにかく急がないと思った僕はすぐさまタクシーを呼んで彼女の指定した場所へと向かった。この時は、まさかそんなことになっていようとは思いませんでした。

タクシーが来てから近道をしてもらってもようやく辿り着いたのは連絡をもらってから一時間近く経ってからだった。その間メッセージのやりとりをしてはいたものの、大丈夫かという問いに『わからない』『とにかく早く来て』としか言われずに僕は何が起っているのかわからず早く着いてくれと悶々としていた。

指定の場所近くで僕はタクシーを慌てて飛び降りると、きょろきょろと辺りを見回した。千紗さんの背はそんなに小さくないからすぐにわかるはずだ。けれど、全然見当たらない。その時だった。



ビルとビルの間の路地に、人影があった。暗くてわかりずらかったが、暗い色のスーツを着ている人が、そこに座り込んでいるように見える。

「千紗さん……!？」

それが本当に千紗さんなのか確証はなかったが、今朝着ていったスーツに似ているような気がしたので僕はすぐさま駆け寄った。そして、膝についてその座り込んでいる人の顔を見ると……

「……た、たかひろ、さん。わたし、一体どうなっちゃったの？」

そこには千紗さんの面影のある少女がスーツに着られるようにして座り込んでいた。

「えっ、と……ええ？」

僕は素っ頓狂な声を上げることしかできないでいる。だって目の前にはどう考えても千紗さんではない年齢の女の子がいるんだ。それなのに、その子は僕の名前を千紗さんと同じように呼ぶ。これは一体……

「どうしよう、ええっと千紗さんは……と、とにかく警察に！」

「待って！」

小さな手が立ち上がった僕のズボンの裾を引っ張った。僕は思わず動きを止め、彼女を見下ろす。

「孝宏さん、待って！ 警察は、だめ、だめよ。お願い、信じて。わたしの、あなたと結婚した、藍澤千紗なのよ」

「そんな……急にそんなことを言われてもどう信じたら」

「……………」

幼い女の子はそつと僕の前に左手を差し出した。どうしたのだろうかと思ったが、よく見るとその薬指にはぶかぶかの指輪が引っかかっている。

「これ、結婚指輪よ。頭がふらついたと思ったら体が急に小さくなって、わたし、まわりのビルが突然大きく伸びていったように思ったの。怖くて、手をぎゅって握りながら座り込んだから……指輪はどうか落ちなかったみたいで」

千紗さんと同じように落ち着いた話し方をする——しかし怯えたように震える声を出す少女に僕は絶句してしまった。

多分、きつとそうなんだ。

彼女は紛れもなく……僕の奥さんだ。



突如として幼くなってしまった千紗さん（であろう少女）を僕は抱え上げると周囲の目を気にしながらタクシーに乗り込んで家へと連れ帰った。タクシーの運転手からは奇妙な目で見られたが、「娘が疲れて眠ってしまって、あははは……」などと言っては見たものの僕にこのくらいの娘がいることなど自分でも想像できない為、もしかするとこのまま交番

まで連れていかれて『幼女誘拐です！』なんて通報されるのでは？ とヒヤヒヤしたもの、そんなことにはならず自宅まで帰ることができた。鍵を開けて玄関の中に入った瞬間僕はどっと疲れてその場に座り込んでしまったくらいだ。

「――大丈夫？ たかひろさん」

先に靴を脱いで部屋に上がっていた少女が僕に手を差し伸べてくれた。がしかし、ぶかぶかのスーツを着ている為、もう片方の手は服がずり落ちていけないようにぎゅっと握ったままである。

「はは……ありがとう、えと、千紗さん」

なんだか妙な気恥ずかしさがあり、僕は彼女の手を取らずどうにか自力で立つと部屋へ上がった。

千紗さんはぶかぶかのスーツだと動くのに困るからか、寝室の方で別の服を探しているようだった。僕はとにかくこの事態を把握せねば、とふらふらの状態でソファに座るとポケットから取り出したスマホで『妻 少女に』と検索ボックスに打ち、(いやいやこれじゃ求めている情報は出てこないかもしれない)と一度全て削除すると『大人 急に 子どもに』と打った。ただ、それでも今回の千紗さんの身に起きた現象を説明してくれるような情報は、すぐには出てこなかった。

「……孝宏さん、ごめんなさい」

か細い声が聞こえて僕は振り返った。そこには下着であるキャミソールを着て、そのうえに短いカーディガンを羽織り、自分を抱きすくめるような恰好で立つ少女がいた。

「あの、その……服が、ぜんぶ、おおきくって……」

「えっ、あ、そうですよね」

千紗さんの身長は165センチくらいあったはずだが、今やそのマイナス50センチほどだろうか。そんなに背が小さくなってしまつては着れる服なんて無いに決まつてる。それに胸も……その、とても小さくなったから、付けれるブラジャーなんてはないんだろう。今着ているキャミソールが少し厚手なのが良かったのか、乳首がツンと浮いている、なんてことはない。というか、あまりにも幼すぎてもしかすると形とかはつきりしてな――

「……孝宏さん？」

「えっ!? あ、あーあははは……ご、ごめんなさい、ちょっとぼーっとしてたみたいで」

「そうよね、わたしでも信じ難いことが起きたんだもの。あなたはもっと信じられないわよね」

そう言うのと千紗さんはしゅんとしよげてしまった。僕はなんだか悪いことしてしまったな、と思い慌ててソファから立ち上がる。

「だ、大丈夫ですよ！僕は信じます！なんたって僕はたった一人の千紗さんの夫ですからね！」

どん、と胸を張って見せると緊張していた千紗さんの表情がふっと緩んだ。

「……夫は、一人に決まってるじゃない。日本は一夫一妻が当たり前よ」

「あ、あははーそうですよねえ」

「でも、あなたが夫でよかった。信じてくれたもの」

千紗さんはそう言うと言僕の方へ近づいてきて、ソファへと座った。僕も隣に腰かける。

「あ、あの、とにかくこの現象をどうにか調べてみましょう！ どうしたらいいか、すぐ病院に行くべきなのか……あとは対策方法もあるかもしれませんし」

「そうね、私もネットで検索してみるわ」

それから僕と千紗さんはインターネットでこのおかしな現象に似た例がないか調べた。調べて、調べて、調べて、もう手掛かりなんて何もないんじゃないかと思った時だった。

「……これ、何か関係あるかしら」

千紗さんが見つつけてきたのは日本の医師が書いた論文の抜粋らしかった。

医療系のあるコラム記事のページで見つかり、その抜粋された文章の中に《成長逆行》という言葉があったのだ。

「成長、逆行……？」

僕は首を傾げる。千紗さんも同様に聞いたことの無い言葉らしかった。

その時すでに夜の十一時を過ぎていたものの、僕はそのコラム内に書かれていたライター
のメールアドレスに医師と連絡が取りたい旨を書いて送った。今日起きた不可思議な現象と、こちらの電話番号も一緒に。

——翌朝、早い時間に僕のスマホへ知らない番号から電話がかかってきた。

かけてきたのは、論文を書いたという医師だった。

へある日嫁がロリになりました!? ①初めての絶頂編 サンプル 終